
小説・吸血鬼の村（出題編）

iris Gabe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小説・吸血鬼の村（出題編）

【Nコード】

N3777Z

【作者名】

iris Gabe

【あらすじ】

亡き母が生まれ育った長野県南佐久郡の鬼夜叉村を訪れた青年飯村和也は、そこで村長である梅小路権蔵氏の凄絶な死を目の当たりにする。さらに翌朝、こんどは主治医のむごたらしい遺体が屋敷から見つかった。生き残りたければ、村人に成りすました二匹の魔物を見つけ出して処刑するしかない。果たして、十一人の中の誰が恐ろしい吸血鬼なのだろうか？

オンラインゲームのプレイヤーとして、登場人物たちの虚を見破り、真相を暴き出してください。『出題編』の最後には、『読者へ

の挑戦』の章が用意されています。

1 鬼夜叉村（前書き）

登場人物

高橋

精司

東野

梅小路

琴音

大河内

柳原

猫谷

土方

菊川

宮田

西園寺

飯村

子爵

小間使い

令嬢

青年執事

七竈亭女将

行商人

陸軍中尉

蠟燭職人

霊媒師

未亡人

書生

志乃

毅

葵子

琴音

毅

志乃

庄一郎

晃暉

六郎

鈴代

都夜子

和也

目次

- 1 鬼夜叉村
- 2 十一人の村人
- 3 ささやかなる村の掟
- 4 腹の探り合い（初日、日中）
- 5 どちらが本物？（初日、日中）
- 6 恐怖の夜（初日、夜）
- 7 令嬢の想い先（二日目、日中）
- 8 今宵、処刑すべき者（二日目、日中）
- 9 まぶたに浮かぶ美女（二日目、夜）
- 10 探偵の調査報告（三日目、日中）
- 11 天文家登場（三日目、日中）
- 12 小間使いの推理（三日目、日中）

- 1 3 ・今夜こそ殺される？（三日目、夜）
- 1 4 ・不可解な鬼たちの行動（四日目、日中）
- 1 5 ・チエツクメイト（四日目、日中）
- 1 6 ・読者への挑戦

1・鬼夜叉村

一つや二つくらいなら、誰にでも取り柄なるものが存在する。こんな僕でさえ、人に自慢できる特異な能力を持っている。それは、想像力である。

例えば、ビルディングの外にいて、窓越しに中の様子が垣間見られたとしてみよう。常識的な人ならば、大きな本棚が見えたとか、正面にテレビが置いてあったとか、せいぜい、その程度の通俗な感想が浮かぶだけであろう。でも僕の場合は、視覚から得たわずかな情報から、イメージがどんどん増殖していき、やがては、あたかもその建物の中に自分がいるかのような、異様な感覚に達してしまう。

階段が見えれば、その傾斜角度から、階段を上っている時に感じる、視界の景色や、重力の強さ、絨毯が反発する感触　などが次々と脳裏に浮かんでくる。さらには、壁掛けランプから放たれる鯨油が焦げた匂い、炎がくすぶる時に発するかすかな音、そして、頭上の踊り場にゆらりと佇んでいる黒い人影……。

医者^{いしや}の診断によれば、僕は神経症を患っている、ということらしい。今、僕は自宅でパソコンを開いている。そして、最近見つけたオンラインゲーム・サイトに入って、ゲームが始まるのを今か今かと待ち構えているところだ。すでに僕は、ゲームの中に設置された仮想世界の住民であるかのような錯覚に、ずぶずぶと沈み込んでしまっている。だんだん、現実と虚実の境界線が判別できなくなる。頭が重い。眼もうつろになってきた……。

車窓の外は、ひっきりなしに豪雨が降り続けていた。小型のワンマンバスが、エメラルドグリーンに輝く溪流に沿った砂利道を、泥を撒き散らして走行していた。終着点は上流に位置する鬼夜叉村だ。

僕はまだ鬼夜叉村を見たことがない。そしてそこは、母が生まれ育った村でもあった……。

母は、大正五年に僕を生んでから、間もなく病で亡くなったと、父からは聞かされている。身体は弱かったけど、聡明でとても美しい女性であつたらしい。鬼夜叉村には母の実妹がいて、つづまやかに宿屋を営んでいる。宿屋の名前は『七竈亭』ななかまどていと聞いている。母に関する手がかりといえば、今のところ、それだけしかない……。

バスはどんどん暗い森の奥深くに入っていく。打ちつける雨とバスの走行音以外に聞こえてくる音と目したら、時おり鳴く鴉かひやの甲高い声と、溪流の早瀬が奏でる水の音くらいだ。

まるで母の胎内に潜り込んでいくような気持ちがあった。母の秘密を解く鍵は、まだこの村に残っているのだろうか？

バスに乗っていた乗客がぼつりぼつりと減っていき、最後に残ったのは、僕ともう一人だけとなった。そいつは、なにやら大きな四角い籠かごを背負って、誰もいないのに一人でニヤニヤ薄ら笑みを浮かべている、痩せた中年男だった。

男が振り返って、僕をじろじろと眺めてきた。

「よう、あんた。鬼夜叉に行くのかい？」

「はい。そうです」

「そうかい。めずらしいな。こんな山奥の寂れた村に、何の用だ？」

「はい。知り合いを訪ねてやってきました。母の妹にあたる叔母です」

「ふーん、あんた、仕事をしているようには見えないが……」

「はい、東京で学生をしています」

「なるほど、書生さんか……。俺はさすらいの行商人で、猫谷ねいといふんだ。薬を売りに、ここにはよくやってくるのさ。よろしくな」

「あのお、猫谷さん。どんな村ですか？ 鬼夜叉村って……」

「ふつづの村さ。ありきたりの。ただ土地は痩せていて、どちらかといえば不便な部落だな。村人はもうわずかだし、このままじや廃村になっちまうのもさほど遠くないことだろう。おお、そうそ

う。とにかく美人が多い村だな、あそこは……」

「美人？」と、僕は呆気にとられて、聞き返した。

「そうなんだ。あの村には、何故か伝統的に器量が良い娘が多いんだ。そういう血筋なのかもしれん……」そういつて、猫谷は窓の外に目をやった。「それにしてもひどい雨だな。何か不吉なことが起きなければいいのだが……」

バスは、終着点の鬼夜叉という停車場に到着した。僕と猫谷がバスから降りた時、心配していた雨はかなり小降りになっていた。辺りは徐々に暗くなっている。遠く彼方から、狼の遠吠えが連呼して聞こえてきた。

「どこにも家が見えませんか。どっちに行けばいいのかな？」

「ついてこいよ。村はこっちだよ」と、猫谷は僕を手招きして、とぼとぼと歩き出した。

途中、草が生い茂った道の脇に檜かしの巨木がそびえており、その下に石地藏と小さな祠ひらが立っていた。

「立派な檜の木ですねえ」と、僕が感心して足を止めた瞬間であった。突然、木の陰から猿のように人影が飛び出してきて、両手を広げて立ちはだかった。白装束の下に赤い着物を着こみ、顔を白粉おしろいで真っ白に塗りたくった女だ。女は、手にした先が瘤状こぶの大きな杖を、威嚇するかのようには僕の目の前に突きつけてきた。

「あんた……、これからどこに、いくつもりだね？」

「ええ？ この先の鬼夜叉村まで……」

縮こまりながらも、僕はしっかりと口調で答えた。白装束の女は品定めをするように、僕をじろじろ覗き込んでいる。

「ふん、うぬの身体からは、禍々まがしき邪悪な気配が、どくどくと発せられておる。なんとということじゃ……。村に不吉をもたらすよ者よ。ここを通ることはまかりならぬ。さあさあ、とっとと引き返せ！」

やや語調を荒げて、女が罵声を浴びせかけてきた。しかし、横に

いる猫谷は、相も変わらず飄々ウツクとしていた。

「なんだ、なんだ。お鈴さんじゃないか。いったいどうしたんだい？」

そういつて、猫谷はちらりと僕に目を向け、「書生さんよ。このおばさんはこのお宮を管理している鈴代すずよさんだ。悪い人ではないよ」と説明した。

「ええい、うるさい！ その若蔵よ。このまま、うぬが村に行けば、血塗られた忌まわしき惨劇が、必ずや起こってしまうのじや。ああ、なんと、恐ろしいことか……。さあ、今すぐに引き返せ。さつさと、この村から消えてしまえ！」

猫谷はニコニコしていて、相手にしなかった。「そんなこといつたつて、夜も遅いし、バスはもうないんだ。いつまでも訳のわからないことをいつてないで……。なっ、お鈴さん」

猫谷は僕を庇かばうように肩をつかんで、女の横をすり抜けた。女は恨めしそうに、ずっとこちらを睨み続けていた。

「ほうら、あれが鬼夜叉村だ。どうやら、日暮れには間に合ったみたいだな」と、峠を越えた下り坂で、猫谷が前方を指差した。

僕たちが立っている丘のふもとに、小さな集落がポツンと姿を現した。建物の数はせいぜい十戸ほどで、村の中央を流れている小川に沿って一本道が横たわっていた。その両端、つまり集落の西と東の端っこに相当するところに、将棋の飛車と角を思わせるような高台があり、大きな二軒の豪邸が競い合うように建っていた。

「右手の御殿が、梅小路権蔵うめいっし村長のお屋敷だ」と、猫谷が東側にある黒い瓦屋根の豪邸を指差していった。「そして、反対側の洋館が、高椿子たかつばね爵の邸宅だな」

こちらは外国のおとぎ話に登場する宮殿を思わせるような、洒落た建物だった。

「梅と椿ね……」と、思わず僕はうなずいていた。

長いつづら折れの坂を下って、僕たちはようやく鬼夜叉村にたど

り着いた。道の小脇の所々に置かれた石灯籠には、一つ一つにきちんと炎が灯されていた。小川のほとりの水車がコトコトと静かに音色を奏でている。おそらく、蕎麦そばを挽くために設置されたものであるろう。

集落の真ん中までやってくると、叔母が営んでいる旅館・七竈亭ななかまじと書かれた看板は、すぐに見つかった。旅館に入ろうとする僕に向かって、猫谷が後ろから声をかけてきた。

「なんだ、書生さんの叔母って、ここの女将おかみだったのか……」
「はい、そうです」

「それなら話が早い。俺も今夜、この宿に泊まるうと思っていただ」といって、猫谷は遠慮なしに僕についてきた。

玄関から中に入ると、真正面に威いかついで武者の甲冑かっちゅうが飾ってあった。兜かぶとには、ど派手な三日月形の装飾がほどこされている。

「ところで、書生さん。あんた、この宿の七竈ななかまじの意味は知っているのかい？」

「いえ、確か、植物の名前ですよね？」

「そう、赤い実がなる樹木だ。名前の由来は、七回竈に放り込んでも決して燃えない、ということから来ている」「そういって、猫谷は意味ありげに口もとを緩ませた。

虫よけのために噴霧された溶剤の独特な匂いが、玄関口に漂っていた。やがて、奥の方から、檜皮色ひわだの着物を着た長身の女性が姿を現した。

「まあまあ、こんな山奥の村までようこそ。あらまあ、あなた……、ひよつとして、和也かずやさんじゃないの？ ほんに姉さんの生き写しだわ！ 立派になったのねえ……」

彼女は、この旅館の女将であり、僕の叔母でもある、柳原志乃やなぎはらのしのぶであった。年は四十を超えているはずだけど、ちつともその年齢には見えない。素肌は瑞々しくて、あでやかな女性である。

「そうですか、バスで猫谷さんと一緒に来たのね。せっかく来てくれたけど、あまり十分なおもてなしはできないのよ……。実は

ね、村長さんが危篤で、ひよっとすると今晚が山になるかもしれないの。村といつても、こんな小さな部落でしょ。だから、ここにいるみんなは、家族のようなものなのね。ちようちよ、これから村長さんのところへ寄ってこようかと、思っていたのよ……」

すると、猫谷が目を輝かせて、横から口をはさんできた。「そうかい、俺も村長さんには随分と世話になっているからな。お志乃さん、一緒について行っていいかい？」

志乃は、一瞬、困ったようなそぶりをみせた。「そうねえ。じゃあ、和也さんも一緒に、どうかしら？」と、今度は僕を誘っていた。

「わかりました。別に予定もないし、喜んで、一緒にさせていただきますよ」

僕が女将に返事した時、猫谷がチツと舌打ちするのが聞こえた。

2・十一人の村人

僕たち三人が村長の屋敷に到着した時には、すでに何名かの村人が集まっていた。僕たちは、屋敷の一番奥にある広い部屋に通された。そこには六名の男女がいた。

「みなさん、遅れてしまって申し訳ありません。こちらは甥の飯村和也かずやです。それから、こちらが行商人の猫谷さん。今夜、七竈にお泊りのご予定です」と、志乃が僕たちを紹介した。

「へえ、志乃さんの甥ということは、綾乃あやのさんの息子さんなのだね。和也君といったかな？ わたしは高椿精司たかつばきせいじと申します」と、タキシード姿の小柄な男が真っ先に反応して、右手を差し出し、僕に握手を求めてきた。僕は素直に応じた。

「なるほどね、綾乃さんのように品の良い顔立ちをしている……」
「母をご存じですか？」

「ああ。わたしがまだ小さな少年の時に嫁がれたのだが、本当に清らかで美しいお方でね。結婚式の行列では、どきどきしながら眺めていたよ。どこかさびしげな表情を、時々、されることもあったなあ。子供心によく覚えているよ」

「そのあと、母はどこにいったのですか？」

「ええと、相手は二男坊だったから、結婚した後は、東京かどこかにいって暮らしている、という噂は流れていたけど……。そんなことは、むしろ、君自身の方がよく知ったことじゃないのかい？」と、子爵は逆に問い返してきた。

「おっしゃる通りなのですが、東京に出て僕を生んだ後で、母はすぐに死んでしまったのです。父も僕が九つの時に事故で世界しました。僕は父方の親戚の下で育てられました。実際、鬼夜叉村にやってきたのは、今日が生まれて初めてです。みなさんには、長い間ご無沙汰しております、大変申し訳なく思っております」と、僕は深々と頭を下げた。

「そうだったのか……。いや、そんなことは気にしなくていいんだよ」

子爵はねぎらいの言葉をかけてきた。「それじゃあ、ここに居る村の衆を、順番に紹介することにしよう。まず、あちらに座ってみえるのが、蝋燭職人の菊川さんだ」

子爵がちらりと目を配った黒背広の男は、顔全体が包帯でぐるぐる巻きに覆われていて、まるで古代エジプトのミイラのような不気味な姿をしていた。他人との会話が嫌なのか、一人ポツンと離れて座布団に胡坐をかいて座っていた。

「顔の包帯は、昔、事故で顔の半分を大やけどしてしまったためと噂されている。詳細は不明だがね」と、周囲には聞こえないような小声で、子爵が耳元で囁いた。

「そして、あちらにふたりいる女性だが、騒いでいる方が宮田鈴代さんという。鈴代さんは、バス停近くにある鬼夜叉神社の世話をしている、ちよつと性格は変わっているけど、根は悪い人ではない。もう一人の若い女は、わたしの家で小間使いをしている東野葵子だ。ああ見えて、非常に利口な娘だな……」

僕は最初から気づいていて目を合わせないようにしていたのだが、向かいの端に座っているのは、檜の木の下で僕たちを脅した中年女だった。村の長が死んでしまうかもという深刻な事態にもかかわらず、用意された酒に酔っぱらって、すっかり上機嫌になっている。その隣で、背筋をピンと伸ばして正座しているのは、見た感じはまだ二十歳前後に見える女性だった。細身で華奢な体つきをしており、幼顔に似つかわず、落ちついた雰囲気がある。

「それから、あそこでお手玉を遊んでいる少女が、村長の一人娘の梅小路琴音嬢だ。可愛らしいお嬢さんだが、少々知恵おくれの気があるんじゃないかとの悪い噂も立っている。真実なのかどうかは、わたしにはわからないけどね」

そういって、子爵は人差し指を伸ばしてこめかみのまわりをくりとまわした。僕は、縁側に座っている緋色の振袖を着た雛人形の

ような美少女を見つめた。彼女は、意味不明な歌を口ずさみながら、一人でお手玉に興じていた。

「最後に、あそこにいるとびきりの美人が……」

子爵が、志乃の隣にいる長い黒髪の女性に目を向けた時、突然、軍服姿の大柄な将校が飛び込んできた。

「おおい、大変だ。たった今、隣村からの電話で、土砂崩れで道路が分断されたという連絡があった。当分の間、バスは村までやってこられないそうだ！」

「おいおい、それじゃあ、俺はこんな村で立ち往生ってことかい！」
知らせに驚いた猫谷が、真つ先に声を張りあげた。その直後、猫谷は自分の失言に気づいたのか、恥ずかしそうに顔を伏せた。

子爵は、将校にちらりと目を配ると、「彼は土方中尉だ。普段は松本の駐屯地に勤務している。たまたま、今は帰省していたんだな。」

それから、七竈の女将さんの横に座っている絶世の美女……、彼女は西園寺都夜子さいおんじ つつよこさんといって、ついこの前、夫を亡くしたばかりの未亡人、いわゆる、後家ごけさんってやつだ」

僕は都夜子さんに目を向けた。確かに鬼夜叉村の女性はみな美人ぞろいだ。しかし、その中でも都夜子さんは別格だった。長い黒髪が艶々とたなびき、上品な形状の口もとは清らかな薄紅色を呈していた。吸い込まれるように魅惑的な濡色ぬれをした瞳が、どこかもの悲しげに潤んでいる。未亡人ということが、とても信じられない。すべすべした桜色の柔肌は、女学校を卒業したばかりの生娘きむすめを思わせるしなやかさがあつた。

時は子の刻（午後十一時から午前一時まで）に入っていた。子爵はさつと立ち上がると、遠慮して誰もがいえなかつた台詞を、堂々と口にした。

「さあ、今日はもう遅くなっちゃったことだし、いつまでここにいてもご迷惑だろうから、そろそろ引き上げようか？」

とその時、梅小路家で執事を務めている大河内青年が、血相を変

えて飛び込んできた。

「大変です。旦那さまが、旦那さまが……」

一同はいっせいに席を立ち、村長の寝室へと向かった。しかし、途中で、彼らの眼前に立ちはだかったのは、うつせみとは思えぬ程、蒼白な形相をした老人であった。足元はかなりおぼつかないものの、獲物を狙うかのごとく血走った眼球が爛々と輝いていた。たまたま先頭にいた子爵を見つけると、老人は狼のような牙をむき出しにして、飛び掛かってきた。さすがの子爵も圧倒されて、腰から後ろに崩れ落ちた。老人は上に覆い被さって、まさに子爵の咽喉もとを食い破らんとしている。

「誰か、たっ、助けてくれ！」と、子爵が悲鳴を上げた。

腕力に自信のある土方将校が、後ろから老人を羽交い絞めにするのと、強引に子爵から引き剥がした。

「大丈夫か？」と、猫谷が子爵にかけよった。

「うん、なんともない」「締め付けられた咽喉もとを苦しそうに抑えながら、子爵が答えた。

「うわあ！」

今度は将校が老人に振りほどかれた。「畜生。なんて、馬鹿力だ！」

老人は、今度は獣のように四つん這いになって身構えた。しかし、それも束の間、苦しそうに顔をゆがめると、おぞましい呪いの言葉を発して、うつぶせに倒れ込んだ。まるで、悪魔にとりつかれたかのようにのた打ち回る老人の姿は、見るもの全員を凍りつかせた。やがて、小柄な老人の身体は、見る見る灰と化してしまった。

「きゃー！」

叫び声を残して志乃が卒倒した。傍にいた都夜子が女将の身体を抱きかかえた。

「そうれ、みろ！ この和也という若者がいかんのじゃ。こやつがこの村に災いを呼び込んでしまったのじゃ！」と、鈴代がこころざしばかりに甲高い声を発した。

「お父さまが、灰になっちゃった……」と、呆然として、令嬢が回廊に立ち尽くしていた。

そしてこの事件は、この村でこれから繰り広げられるおぞましき惨劇のほんの序曲に過ぎなかつたのである。山奥の平穏な鬼夜叉村には、すでに恐ろしい魔の手が忍び寄っていた。吸血鬼に感染した村長の寿命は、たった今尽きたが、ここに居る十一名の男女の中には、真性の吸血鬼が二人も紛れ込んでいたのだ。さらにこの晩、見てはならない吸血鬼王の姿を直視してしまった村人の一人が、王に魅了されてしまった。

3・ささやかなる村の掟

ふと我に返ると、目の前にはパソコンのディスプレイがあった。そうか……、ここは二十一世紀なのだ。僕は背伸びをしながら、自室の薄汚れた狭い天井をぼんやりと眺めた。

今、インターネットの向こう側では、ゲームに参加する十人の姿なきプレイヤーたちが僕を待っている。ここで、各プレイヤーが自己主張している十一人のキャラクター名を列挙しておこう。

高椿精司たかつばせせいじ爵と、その忠実なる小間使い東野葵子とうのあおいこ。亡くなった村長の一人娘である梅小路琴音うめいじつこと、若き青年執事の大河内毅おほいわたし。旅館七竈亭の女将をとめる柳原志乃やなぎはらしのの、さすらいの行商人猫谷庄一郎ねこやぶしやういちろう、さらには、松本駐屯地に勤務する陸軍中尉の土方晃暉ひじかたこうき。蠟燭職人の菊川六郎きくかわろくろうと、自称霊媒師の宮田鈴代みやたすずよ。美しき未亡人、西園寺都夜子さいおんじつやこ。そして、最後の十一人目となる僕の名前は、飯村和也いらいむらかずやである。

ここで、僕が参加する『吸血鬼の村』なるオンラインゲームについて、簡単に説明しておこう。少々、内容が煩雑になってしまいが、本編で展開される真相にたどり着くためには、どうしても、ゲームのルールを正確に把握してもらう必要がある。読者の方には、ご負担をかけることとなるが、どうか、ご容赦願いたい。

ゲームの内容は、大雑把に言えば、それぞれのプレイヤーが、ネット上に設置された伝言板に自由なメッセージを書き込んでいき、そこで交わされる会話のやり取りによって、相手の正体を暴露していき、自分が所属するチームの勝利を目指す、というものだ。ゲームはチーム戦で行われ、勝利条件をクリアしたチームが勝利を収める。チームは二つあり、村人チームと吸血鬼チームに分かれている。十一人の登場人物の中には、二人だけ人間にあらざる魔物が紛れている。それが吸血鬼だ。吸血鬼は、日中は村人の姿で大人しくしているが、夜になると活動を開始して、これと狙いを付けた村人の

一人に襲い掛かる。襲われた村人は、失血多量で死んでしまうか、吸血鬼に感染してしまうかの、どちらかの運命をたどることになる。そのどちらになるのかは、吸血鬼側の攻撃のやり方で決定されるが、詳細は後述する。

二人の吸血鬼の間には上下関係があり、上位の吸血鬼を、吸血鬼の王と呼び、『吸血鬼K』と表すことにする。下位の吸血鬼は、吸血鬼の女王ということで、『吸血鬼Q』と記述される。

さらに、もう一人、吸血鬼チームに所属する人物がいる。それが使徒である。

使徒は、本来は村人なのだが、不覚にも吸血鬼Kの姿を目撃してしまい、魅せられてしまった人物である。特殊能力は何も持たないが、ゲーム当初から吸血鬼Kの正体が誰であるかを知っており（吸血鬼Qの正体は知らない）、吸血鬼チームの勝利を目指してひそかに行動する。村人側からしてみれば、スパイみたいな存在であるといえよう。一方、吸血鬼Kと吸血鬼Qは、他の村人たちと同様、使徒が誰なのかを知らない。

つまり、十一人のプレイヤーの中に三人だけ、吸血鬼チームの人物が紛れ込んでいるということになる。そして、吸血鬼チームの目的は、村を制覇することである。

この恐るべき吸血鬼に対抗する手段として、村人チームは、毎日の夕刻に『処刑投票』を行うことができる。処刑投票は、生き残った全員で行われ、無記名で票が投じられる。そして、得票数が最も多い人物が、その場で処刑されてしまう。しかし、間違つて吸血鬼でない人物が処刑されることも茶飯事である。

ゲームが進むうちに、吸血鬼に攻撃されて、村人が吸血鬼に感染することがある。そこで本書では、ゲーム当初から登場する二人の吸血鬼（吸血鬼Kと吸血鬼Qのこと）を、『オリジナル吸血鬼』と呼び、感染させられた村人『感染吸血鬼』と区別する。

そして、具体的な勝利条件であるが、村人チームは、オリジナル

吸血鬼の二人を抹殺すれば、その瞬間に勝利を収める。一方、吸血鬼チームは、生き残っている村人の総数が（使徒は村人の一人として数えられ、感染吸血鬼は村人の数には数えない）、生き残っているオリジナル吸血鬼の総数以下（同数になれば吸血鬼側の勝利）になった瞬間に勝利を収める。

ゲームの中には、一日という概念があり、次のように進行する。まず、朝になると、生き残っているプレイヤー全員に、前日の死者の確認がなされる（死因までは報告されない）。また、天文家は、前の晩の観測結果を確認することができ、片想いは想い先の相手が吸血鬼に感染していれば、それを察知することができる。探偵は、前日に調査した遺体が残したダイイングメッセージ（遺書）、を読むことができる。

その後、舞台は日中に移り、生き残っているプレイヤーたちが思いの主張を語り合う議論が始まる（いうまでもなく、死んでしまったプレイヤーは、会話に参加することはできない）。探偵は日中の間ならいつでも、遺体と化した人物から毎日一人だけを選択して、その人物の正体を調査することができる。

夕刻になると、生き残っている人物全員による無記名投票で、その日に処刑する人物を決定する。そこで最多得票を獲得した人物は、すぐさま、聖なる杭を胸に打ち込まれて処刑されてしまう。最多票の人物が複数生じた場合には、乱数によって、その中から一人だけが選ばれて処刑される。

そして、夜を迎える。夜になると、いよいよ吸血鬼が活動をはじめめる。まず、吸血鬼Kと吸血鬼Qは、生きていれば、他のプレイヤーたちに気づかれることがない秘密の会話を、互いに交わすことができる。吸血鬼たちは、日中の間は、掲示板に書き込む形でしか会話ができないので、内容は村人たちにも筒抜けとなる。だからこそ、夜の打ち合わせはオリジナル吸血鬼たちにとって格好の作戦を練る場となる。

さらに、吸血鬼（オリジナル吸血鬼と感染吸血鬼の両方）は夜になれば、本能から来る習性によって夜空に飛び立ち、闇夜の村を徘徊する。そして、オリジナル吸血鬼は、夜間に狙った人物を一人だけ襲う。

もし、生き残っているオリジナル吸血鬼が二人いて、同一人物を襲えば、その人物は即座に失血死する。また、オリジナル吸血鬼が二人いて、別々の人物を襲えば、上位の吸血鬼Kに襲われた人物が吸血鬼に感染する（この時、吸血鬼Qに襲われた人物は何も被害を受けない）。

感染させられた村人（感染吸血鬼）は、感染しているという自覚症状はなく、翌朝からも通常の生活を営むことができる。しかし、感染吸血鬼は、ゲームの勝利条件における村人数にはカウントされない。

特殊能力者が感染した場合、探偵は、翌日以降も、遺体の調査や遺言の確認を行うことができるし、片想いも想い先の感染の有無を察知することができる。

しかし、天文家だけは、感染させられると厄介な問題を抱えることになる。感染した天文家は、その翌日の夜から、自分が観測しようと思っていた人物を襲撃してしまい、吸血鬼に感染させてしまう。いうなれば、みずからの意に反して、仲間を吸血鬼に感染させる恐ろしい魔物と化してしまうのだ。天文家としての観測能力も同時に失われてしまい、さらに翌々日の朝になって初めて、観測結果の報告がなされないことを自覚することで、みずからが感染した事実を知ることになる。

なお、二人のオリジナル吸血鬼のうち、片方が死んでしまい、オリジナル吸血鬼が一人になった場合には、その吸血鬼はパワーアップを果たす。すなわち、吸血鬼は一人になると、襲い掛かった相手を必ず失血死させてしまう。これは現実的に考えれば、妙な話ではあるが、特殊なルールだということで理解してもらいたい。

襲撃に関する要点をまとめると、生き残っているオリジナル吸血鬼の全員から襲われた村人は（使徒も含めて）、失血過多により即死する。一方、オリジナル吸血鬼が二人いて、別々の人物に襲い掛かった場合には、吸血鬼Kに襲われた人物のみが、吸血鬼に感染する（吸血鬼Qに襲われた人物は、何も被害を受けない）。

また、天文家が吸血鬼に感染させられた場合、感染した翌日の夜から毎晩、自分が観測する予定の人物を襲ってしまい、相手を吸血鬼に感染させてしまう。

このゲームに参加する十一人の内訳は、オリジナル吸血鬼がKとQの二人、それ以外に、九人の村人たちがいる。村人の中には特殊能力を持った人物が紛れ込んでいる。具体的には、探偵が一人、片想いが一人、天文家が一人、使徒が一人である。残りの五人は特殊能力を持たない無力な村人たちとなる。それでは、それぞれの特異能力者についても、ここでまとめておこう。

まず、探偵である。日中の間、遺体を一人だけ選択して、その調査をすることができる。そして、遺体の生前の正体を、知る能力を有している。もし遺体が、吸血鬼、天文家、片想いであった時には、探偵はその正体をそのまま確認することができる。しかし、遺体が片想いの想い先や使徒であった場合には、『村人である』としか確認できず、単なる村人の遺体と区別することはできない。また、確認した遺体が吸血鬼に感染していたかどうかまでは知ることができない。

さらに探偵は、日中に調査した遺体が残した遺書を、その日の夜になってから、見ることができる。もちろん、その時点まで探偵本人が健在であることが、調査が行える前提条件となるが……。

遺書は遺体の主が殺された時に書き残した文章であり、生き残ったプレイヤーたちにとって、真相解明の大きな手掛かりになる可能性がある（実際のゲームでは、遺書は本人が死を自覚してから、すぐに書かれることになる。例えば、夕刻に処刑された人物はその夜

のうちに遺書を書き残し、夜間に死んだ人物は翌朝の間に遺書を書き残すことになる。探偵は吸血鬼に感染しても、その能力を失うことなく、翌日以降も調査することができる。しかし、みずから吸血鬼に感染している事実を自覚することはできない。

次は、片想いである。片想いは、（吸血鬼、使徒、本人を除いた）七名の村人の中から、自分とは異性である誰か一人に、ひそかに恋焦がれている（想い先の相手は、自分が想われている事実を認識してはいない）。そして、もし、想い先の相手が、夜間に吸血鬼から攻撃を受けて感染してしまうと、翌朝になってから、その事実を察知することができる。

しかし、想い先の相手が処刑されたり、失血死した時には、事実を知った悲しみのあまり、その夜の間に、みずからも後追い自殺をして死んでしまう。

片想いも、吸血鬼に感染させられた際、その特殊な能力を失うことはない。なお、片想いが先に死んでしまった場合には、想われている相手は、その遺体が片想いであることに気づくことはなく、当然のことながら、後追いで自殺をはかることもない。

そして、天文家である。天文家は毎晩、プレーヤーの中の誰か一人を選んで、望遠鏡で監視することができる。これを『観測する』という。

天文家が観測するターゲットは、夕刻までに、天文家の意志で決められる。そして、天文家の観測先が、オリジナル吸血鬼か感染吸血鬼であった場合には、夜間に彼らが家から空へ飛び立つのを、天文家は目撃することになる。その時には、天文家はターゲットが吸血鬼であることを知ることができる。また、観測先が一晩中、夜空に飛び立たなければ、そのターゲットが吸血鬼ではなかったという事実を、確認することができる。

しかし一方で、天文家自身が吸血鬼に感染させられてしまうと、天文家としての能力を失うだけでなく、翌日以降に、観測先にセツトしたターゲットを、夜になると襲ってしまい、吸血鬼に感染させ

てしまう。感染した天文家は、翌朝になって昨晚の観測結果が確認できないこと知り、初めてみずからの感染事実を自覚する。翌日以降も毎晩、感染した天文家は村人の一人を、意に反して襲ってしま

う。
最後に、使徒である。使徒はゲーム当初から、吸血鬼Kが誰であるかを知っている（吸血鬼Qが誰なのかは知らない）。一方、オリジナル吸血鬼の二人は、使徒が誰なのかを知らない。つまり、吸血鬼同士はお互いを認識しており、使徒は吸血鬼Kを知っているが、使徒は吸血鬼Qを知らず、吸血鬼たちは使徒を知らないということだ。

さらに、使徒は吸血鬼チームの勝利を目指す人物である。つまり、吸血鬼側が勝利すれば、使徒も勝利したことになり、村人側が勝利すれば、使徒は敗北したことになる。しかし、勝利条件のカウントでは、使徒は（感染していなければ）生き残っている村人の一人として数えられる。

ああ、そろそろゲームが開始される時刻だ。

さて、ここで読者のみなさんには正直に告白しておこう。このゲームで、僕こと、飯村和也に割り当てられた配役は、『何の能力も持たないただの村人』である！

場面は鬼夜叉村の村長の屋敷、眼前には、一見悲しげな表情をした村人たちが、村長の遺体があった場所を取り囲んでいる！

4・腹の探り合い（初日、日中）

村長の壮絶なる死のどたばたも冷めやらぬ中、村人たちは後片付けに追い立てられ、ようやく区切りが付くと、時刻は丑の二の刻（午後一時半から午後二時まで）になっていた。やむを得ず、村人たちは屋敷の数多ある部屋に、それぞれ分かれて泊まることにした。精も魂も尽き果てた彼らは、そのまま深い眠りに落ちていった。

翌朝になると、十一名は、さらに凄惨な光景を目の当たりにすることになる。村長の様態をずっと診て来た、鬼夜叉村で唯一の医者である久保川先生が、屋敷の中で遺体となつて発見された。あるところか、その遺体は血の気が全く失せていて、こげ茶色に干乾びていた。さらに、死の間際に受けた恐怖のためだろうか、顔面は粘土細工のようにいびつにゆがんでいた。尋常ならざる事態を察した村人たちは、ふたたび大部屋に集結して、今後の対策を検討することにした。

そして、この瞬間に、十一人のプレイヤーによる、熾烈なゲームの幕が切つて落とされたのだつた。

高椿子爵「ゲームマスターから告げられた情報の確認を行いましよ。今回のゲームは参加者が十一名で、その中に吸血鬼は二名います。それから使徒が一人いて、村人側の特殊能力者は、天文家が一人、探偵が一人と、あとは片想いが一人ですね。残りの五人は何の能力も持たない無力な村人であります。我々はこの事実をもとに、これから推理を進めていくことになります」

小間使い葵子「ご主人さまの仰せの通りだとすれば、吸血鬼が行動を起こす夜がやってくる前に、わたくしたちは何か対抗策を講じなくてはなりません」

霊媒師鈴代「今、ここには村の衆がみなそろつておる。われらの手で、忌まわしき鬼どもに聖なる杭を打ち込んでやるのじゃ！」

令嬢琴音「お父さまを殺めた悪い鬼たちを退治しちゃうんね……」
というと、少女はかわいらしい口もとに不気味な笑みを浮かべた。
執事大河内「ちよつと待ってくださいよ。処刑を執行するといつても、いったいどうやって、肝心の吸血鬼を見つけ出すのですか？」
行商人猫谷「たとえ、見つけ出すのが困難であつても、日が暮れるまでに、こん中の誰かを処刑しなければならねえ。吸血鬼が一旦行動を起こせば、九人の村人なんて、あつという間に全滅させちまうからな」

土方中尉「いずれにせよ処刑は全員の上承を得なければならぬ。これからの議論で、憎き吸血鬼をいぶり出すのだ！」

書生和也「だけど、吸血鬼がみずから『僕は吸血鬼です』なんて告白するはずないし、誰かを吸血鬼と断定するなんて、実際、不可能じゃないかな？」

後家都夜子「おっしゃる通りですね。今のところ、わたしたちに吸血鬼を判断する明確な材料は、何もありません」

女将志乃「だったら、それを作り出すのよ！ これからの話し合いでね」

行商人猫谷「ふふつ、こりゃあ面白い一日になりそうだな……」

と、
唐突に、白装束の霊媒師が烏帽子をかぶった頭をあげたかと思う

霊媒師鈴代「つまらん話し合いなど無用じゃて……。わたしにはわかっている！ 邪悪の根源は、ほうれ、そこにのうのうと居座つておる、そいつじゃ！」と叫び、ゆっくり指を動かした。

女将志乃「まさか……、和也さんが？」

書生和也「ちよつと待ってくださいよ。僕は、今日、この村に来たばかりですよ。鈴代さんとは、これまでに一度も面識はないし……、どうして僕が吸血鬼だなどと、いいかげんな発言ができるのですか？」

霊媒師鈴代「ええい、黙れ、黙れ、黙れ、黙れ、黙れ、黙れ、みな衆、

こやつこのやつの口車に乗ってはならぬ。未来を予知できるわしには、こやつこのやつの思うとることが手に取るように見えるのじゃ」

高樫子爵「まあまあ、お鈴さん。まだ、和也君が吸血鬼である具体的な証拠は、何もありません。あなたの霊視能力には敬意を表しますが、残念ながら、それは我々凡人には理解不能であります。

我々にも納得できるような明確な証拠を、これからの話し合いで探していこうじゃないですか」

行商人猫谷「しかしなあ。話し合いといっても、何を議論するんだい。このままじゃあ埒らちあかねえぞ。まさか、銘々が順番に自分の正体をここで白状しろとでもいうのかい？」

女将志乃「そうねえ、案外いい考えかもしれないわ。みんなが正直に自分の正体を暴露するのよ」

執事大河内「そんな無茶な……。失礼ながら、わたくしめには、吸血鬼が自分の正体を正直に告白するとはとても思えません。きつと、彼らはみずからの正体を隠し、嘘を吐くことでしょう」

女将志乃「いいじゃない。望むところよ。仮に吸血鬼が『わたしは天文家である』などと嘘の告白をしたとするわよね。でも、あたしたちの中には本物の天文家もいるのよ。当然、彼も自分が天文家であると主張するから、天文家がふたり現れることになるわ。そして、その後の供述でどちらが本物なのかは、すぐにわかっちゃうから、結果的に吸血鬼を引きずり出せるというわけよ」

高樫子爵「ちよつと待ってください。志乃さん、あなた今、天文家のことを『彼』といいましたよね。何かご存じのことがおありなのですか？」

女将志乃「あらあら、あたしとしたことが。うっかり口から出ちゃっただけ。何となく天文家は男性だと思ってしまったのよ。いわれてみれば、女性かもしれないわよね……」と、女将は反省する素振りを表した。

高樫子爵「わたしはむやみに全員が自分の正体を暴露することには反対です。しかし、このままでは、議論自体も停滞してしまいます。

そこでどうでしょう？ 正体を告白しても、村人側にとってさほど痛手とはならない特殊能力者だけに、みずからの正体を告白してもらうのです！」

土方中尉「ふむ、村側にとって痛手にならない能力者とは……？」
高樫子爵「まず、天文家の告白はありえませんが。そんなことをしたら、即行で吸血鬼の餌食えしきになってしまいます。天文家はひそかに夜の観測をすることが肝心ですからね。

同じ理由で探偵であることの告白も、今日の間はしない方がよろしいでしょう。したがって、告白することができる人物はただひとり……、片想いをされている方です！」

土方中尉「しかし、片想いが正体を暴露してしまえば、当然、今晚の吸血鬼たちの格好のターゲットになってしまうのではないか？」
高樫子爵「その通りです！」と、子爵がきっぱりと断言した。

土方中尉「な、な、なんと……。それでは片想いに、わざわざ殺されるために名乗り出よ、とっておるのか！」
高樫子爵「まさに、中尉のおっしゃる通りです！」子爵は平然として答えた。

行商人猫谷「俺には高樫の坊ちゃんがいつていることはわかるな。片想いなんて、相方が吸血鬼に感染した時のみ、それを認知できるというだけで、そうでなければただの村人となんら変わりはない。さらには、相方が失血死すれば、後追い自殺をして犬死にするだけだ。

もし、片想いが名乗り出て吸血鬼に襲われれば、結果的に、村側にとってより重要な職業である天文家と探偵の両方の命を救うことになる。天文家と探偵は二日目以降にならないと能力を發揮しないから、初日に殺されてしまったら、その損害は計り知れん」
土方中尉「なるほど、そういうことなら、余も納得できる」
女将志乃「でもねえ、自分を犠牲にして村を救うというの？ そんな英雄、果たしているかしらね」

高樫子爵「お願いです。この中にいる片想いの方！ ぜひ、今、名

乗り出てください！」

後家都夜子「無理ですわ！ 誰だって命は惜しいものです」

小間使い葵子「わたくしは、ご主人さまの名案に賛成です。片想いの方は正直に申し出るべきです。ただ、想い先のお相手のお名前は暴露してはなりません。それこそ、吸血鬼に目標を教えてしまう愚かな行為だからです。そして、わたくしからまず先に告白いたします……。わたくしは片想いではございません！」

高椿子爵「さすがは葵子だ。冷静な判断だね。それでは続いてわたしも告白しましょう。わたしも片想いではない。すなわち、今、恋などしてはいない！」

女将志乃「それならあたしも告白させてもらうわ。あたしは、もう恋なんて卒業しちゃったのよね。つまり、あたしは片想いではありませんーん！」

土方中尉「ふむふむ……、そういうことなら仕方ない。余も告白するでしょう。余も今、恋愛などという悠長なことに携わっている暇はない！」

書生和也「僕も告白します。残念ながら、今、僕は恋をしております」

行商人猫谷「俺も片想いなんてしていません……」
高椿子爵「これで一気に六人が、自分は片想いではないと告白したみたいだね。残るは五人だ。まずは、菊川さん、あなたはいかがなのですか？」

蠟燭職人菊川「ふん、くだらない！」

高椿子爵「ええと、それでは答えになっていませんよ。菊川さん。あなたは片想いされていますか？」

蠟燭職人菊川「発言を拒否する。片想いを告白することが村側のためになるとは、思えないからだ！」

高椿子爵「いいでしょう。でもあなたが発言を拒まれたという事実、今後の議論で一つの状況証拠ともなり得ますからね。じゃあ、琴音お嬢さまはいかがですか？」

高椿子爵「それでは、琴音さんがただひとり、ご自分が片思いであると告白されました。他のみなさまに最終確認です。琴音さんに対して、自分が片思いであると、あらたに告白される方はみえませぬね？ よろしいでしょうか？」

子爵がぐるりと見回したが、誰一人、声を発するものはいなかった。

高椿子爵「琴音さんが片思いであるとすれば、吸血鬼たちは当然のごとく、相手の男性の失血死を狙ってくることでしよう。琴音さんを襲うことは簡単ですが、それでは琴音さんのご遺体が一人出るだけです。でも、お相手の男性を首尾よく殺すことができれば、琴音さんも思い余って後追い自殺をしてしまいますから、犠牲者は一気に二人。吸血鬼にとっては、まさに一石二鳥というわけです」
執事大河内「すると、今晚狙われるのは男性でございますか……？」
怖気づいた執事が訊ねてきた。

土方中尉「もし余が吸血鬼であれば、まずは天文家の感染を狙うであろう。天文家を生かして感染させることができれば、感染した天文家は、翌晩から村人を襲い続けるから、そうなれば、一晩に二人の犠牲者を生み出すことが可能となる。吸血鬼たちにすれば、天文家の感染は勝利のための大きな躍進なのだ！」

蠟燭職人菊川「感染した村人は勝利条件にカウントされないから、鬼たちにとって、失血死と感染はどちらにせよ、健在な村人を一人減らしていることになる。だから感染天文家は、鬼たちにはこの上なく好都合な存在だな」

書生和也「万が一、天文家が感染させられると、何が起こってしまうのですか？」

蠟燭職人菊川「まず、翌日の夜になって観測ができないことを知り、自分が感染させられてしまったことに気付く。それと同時に、観測先に指定していた人物を襲撃してしまい、相手を吸血鬼に感染させてしまう。しかも、そのまた翌日以降も、自らの意に反して、夜になると観測先を襲ってしまうから、村側にとって消さなければなら

ない厄介な存在となる。

しかし、吸血鬼がせっかく感染させた天文家をわざわざ殺すわけがないので、みずから名乗り出て、感染を告白し、処刑されること
が、唯一の村に貢献する行為となってしまうのだ。悲しい運命さだめだな

……」

書生和也「でも、肝心の天文家を、吸血鬼たちはどうやって探し出すのですか？」

土方中尉「それは……、直感しかないであろう。ただ、余が主張したいのは、吸血鬼たちの狙いが、お嬢さまの相方の失血死だけだという意見には、必ずしも納得できないということだ。吸血鬼たちが天文家の感染を狙って来る、ということも十分に考えられるからだ
！」

小間使い葵子「そういうことになる、吸血鬼が感染を狙う相手は、逆に女性だということになりますね！ 天文家が男性なのか女性なのかは、全く情報がありません。しかし、吸血鬼側が、感染狙いでうっかり琴音お嬢さまの想い先を感染させると、たちまちお嬢さまにその事実を悟られてしまいます。そうなれば、お嬢さまと想い先の男性の両名が白（村人側の人物）であると、はっきり確定するわけです。この情報は、村側にはとても貴重であり、吸血鬼たちにとっては極めて厳しいものに違いありません。ですから、吸血鬼たちは、男性を感染させる行為をとりあえず控えると思われませう」
後家都夜子「つまり、今宵の吸血鬼たちは、失血死狙いなら男性を、感染狙いなら女性を襲うというわけですね？」

行商人猫谷「潜伏している天文家が、男だと村側の脅威は小さいが、女であるとする……、かなり厄介だな！」

高椿子爵「片想いのお嬢さんは、今晚に限っては、案外、吸血鬼たちから襲われないかもしれませんね」

令嬢琴音「子爵さま、それ信じていいの？」

高椿子爵「さあ、どうでしょうね？ しかし、そうならば、村側の勝利の鍵となる天文家を守るためにも、もう一つの特異能力者であ

る探偵の告白が必要になつてきましたね……」

蠟燭職人菊川「ちよつと待て！ あんた、どうかしてるんじゃないか？ さつき片想いを告白させといて、今度は探偵の告白を強要するなんて！」

憤いきりおつた菊川が、拳こぶしで畳をドンと叩いた

高椿子爵「冷静に考えて、ベストな選択だと思えますがね。たとえ、めくら鉄砲でも獲物をしとめることはあります。万が一にも今晚、天文家が被弾してしまつては、元も子もないでしょう？」と、子爵はすまし顔だ。

令嬢琴音「いけにえ候補のうちがいうのもなんだけど、今日、探偵が告白するのはよくないと思うな。天文家を吸血鬼たちが探し当てるのは難しいと思うし、探偵にはこれから働いてもらわなきゃならんし……」

女将志乃「あたしもお嬢さまの意見に賛成ね。わざわざ探偵が名乗り出るのは、リスクが多過ぎるわ……」。

ところで、猫谷さん。話は変わるけど、この前お願いしておいた塗り薬をいくらか調達していただけないかしら。もうちよつとで切らしてしまうのよ」

行商人猫谷「ええつ、よりよつてこんな時にかい？ わかりましたよ。いかほどご入り用で？」と、猫谷は突発的な申し出にかなり面食らつていた。

女将志乃「そうねえ、とりあえず二缶くらい。お代は後で渡すわ。そうそう、うちの庭にきれいなほおずきの実がなつているから、ついでにそれも持つて行つてあげましょう」

行商人猫谷「ほう、ほおずきとね……？」

女将志乃「そうよ。何の役にも立たないけど、きれいにいっぱいなつているわ。ちよつと、あたしみたいだね。ふふふ……」

すっかり話題が世間ばなしに飛んでしまつたので、見かねた将校が顔をしかめて発言した。

土方中尉「余は探偵の自白に賛成である。やはり、探偵より重要な

天文家を守るこそ肝心だと考えるからだ」

霊媒師鈴代「何を愚かなことを……。村側の守り神たる探偵の居場所をばらしてしまえば、崇りこそあれ、何のご利益もありませんわ！」

執事大河内「わたくしは探偵が名乗り出ることに賛成です。能力者が複数名乗り出ること、吸血鬼たちも混乱するでしょうし、的を絞らせない意味でも効果は大きいと思います」

後家都夜子「執事さんのおっしゃることは、全然わかりません！片想いと探偵では、鬼たちにとって、厄介な度合いが異なります。探偵の正体がばれてしまえば、どう考えても、鬼たちは探偵を今晚の餌食とすることでしょう」

小間使い葵子「そうとも限りませんわ。例えば、何も能力のない村人が、『自分は探偵である』と偽ることも可能だからです。つまり、誰かが探偵であると名乗りを上げて、吸血鬼側からしてみれば、それが真実かどうかを確かめるすべはない。だから、何の能力もない村人が偽れば、その方は殺されてしまいますが、そのおかげで、探偵と天文家の両名を救えます！」

行商人猫谷「なるほどね。みずから殺されても村側にさほど影響がない無能力の村人が偽りの告白をすることもあり得るわけだ！でも、そんな献身的な英雄が、果たしているのかねえ？」

高椿子爵「とにかく、議論が滞ることをわたしは危惧します。それではわたしから告白いたしましょう。わたしは探偵ではありません！」

霊媒師鈴代「ふむ、そういうことなら、わたしも探偵ではないぞ！」
土方中尉「余も探偵ではない。推理小説にはすこぶる興味があるのだが……」

令嬢琴音「いうまでもなく、うちは探偵じゃあらへんよ」
行商人猫谷「俺も探偵ではないよ」

蠟燭職人菊川「待て、待て。これ以上、探偵の非告白をしてはならない！吸血鬼どもに無駄に情報を提供するだけだ！」

執事大河内「わたくしめも、探偵ではございません！」と、青年執事はここぞとばかりに発言した。

後家都夜子「わたしは菊川さんのお考えに同意します。したがって、探偵に関してわたしはノーコメントです」と、美貌の未亡人は凛といい放った。

書生和也「僕は……、どうしたらいいんだろう？ うん……、僕は探偵ではない！」

小間使い葵子「わたしも探偵ではございません」

霊媒師鈴代「これで何人が探偵でないと告白したかの？ ええと、わしに子爵、中尉にお嬢さま、猫谷に執事と小間使い、それに、呪われた若僧か。残り三人じゃな。すなわち、蠟燭作りに七竈の女将、それに都夜子じゃ。さあ、誰から白状するね！」と、鈴代が歯を見せて笑った。

女将志乃「わかったわ。そろそろ潮時ね……。あたしが探偵よ！だから、今日の夕刻の処刑投票では、絶対にあたしは外してくださいね」

七竈亭の女将が、観念して色白の両手をゆっくりさし上げた。

5・どちらが本物？（初日、日中）

高椿子爵「おお！ ついに告白してくださいましたか！」と、いつになく興奮した口調で、子爵が喜びをあらわにした。

行商人猫谷「お志乃さんの探偵告白を、確認しました。でも、せつかくだから、残った二人の意見も聞いときたいな。蠟燭作りさんよ

、あなたは探偵でないと告白してくれるのかい？」

蠟燭職人菊川「いうことは何も無い！ 鬼たちに、無駄に手がかりを提供するだけだ！」

行商人猫谷「そう来ると思ったぜ。じゃあ、別嬪^{べっぴん}さん、あんたのご意見を伺いたいな」と、猫谷は未亡人のふくよかな胸元に横目を移した。

後家都夜子「わたしも、お答えしたくありません！」

行商人猫谷「ちよっ！ まあ、いいだろう。とどのつまり、志乃さんに対抗して、探偵だと告白する人物はいない、ってことだよな？」

猫谷の発言に異議を唱える者はいなかった。それを確認すると、探偵宣言をした柳原志乃が一步前に踏み出た。

女将志乃「ということ、ここからはあたしが会議を仕切らせてもらうわよ。夕刻もだんだん押し迫っているし。さて、みなさん。さっそくだけど、本日の処刑投票で誰に投票するつもりなのか、ご意見を伺いたいわ」

霊媒師鈴代「吊るし上げるのはよそ者に決まっとなる！ ほうれ、その若僧よ」

鈴代が待つてましたとばかりに雄叫びをあげた。

書生和也「そんな、めっちゃめっちゃだ！ だいたい僕は、これまで発言もほとんどしていないじゃないですか！」

土方中尉「若者よ、得てして、無口な者は吊るされやすくなるのだ！ 生き残りたければ、何か発言をすることだ！」

書生和也「そんなこといわれても……。みなさん、信じてください。

僕はただの村人です！」

行商人猫谷「おいおい、自分の正体までばらしちゃって。お前、気は確かなのか？」

書生和也「はっ、つい……」

後ろにいた子爵が、苦笑いをしながらいった。

高椿子爵「さあて、和也君の今のリアクションは、果たして真実なのか、はたまた名演技なのか？ どちらなのでしょうね？」

後家都夜子「いずれにせよ、和也さんが黒（吸血鬼側の人物）だという事実は、ひとつもありませんわ！」

行商人猫谷「まあ、そういうことになるな……」と、猫谷はやや不満げに返事した。

女将志乃「それじゃあ、あたしからしゃべらせてもらうわ。前にも白状したようにあたしは探偵です。だかられっきとした村側、すなわち白（村側の人物）です！」

こんなあたしが、これまでのみなさんの発言を思い返して、一番黒っぽいと感じる人物は、何となくだけど……、大河内さんなの！

特殊能力者が告白すべきかどうかの議論に関して、意見を二転三転させているのが、とつても気になるのよねえ……」

土方中尉「確かにそうだ。片想いの時には、告白に反対だといっておきながら、探偵の時は、賛成に回っている。意見に一貫性が感じ取れない！」

それを聞いた大河内青年は、顔から血の気が一気に失せ、真っ蒼になった。

執事大河内「待ってください！ わたくしはとつさに物事を判断するのがいつも苦手で、考えているうちに訳がわからなくなることもございます。一貫性がなかったといわれれば返す言葉もございませんが、決して、あの時の発言は意図的なものではございません！」

行商人猫谷「なるほどな。片想いの告白を積極的に唱えたのは、高椿の坊ちゃんと土方中尉、それに葵子だった。それに対して、強く反対をしたのが、蠟燭屋と大河内君だ。一方、探偵の告白を押し

た人物が、高椿子爵に土方中尉、そして大河内君だ！ 反対は、蠟燭屋にお志乃さんに霊媒師……、別嬪さんも反対色が強そうだったかな？ やはり、大河内君だけが、一貫性がないことになってしま
うな……」

霊能者鈴代「ならば、今宵の生贄いけにえとすべきは、まず第一に書生、それから次に執事じゃな」

土方中尉「それでは、処刑すべき人物として、余は大河内青年を一番に押す。理由はみなと同じである。そして、次に怪しき人物は、蠟燭師だな。理由は、言動が協調性に欠けるからだ」

女将志乃「それじゃあ、中尉さまの発言のように、みなさん一人一人に、今日処刑すべきと思っっている人物を、順に二人ずつあげていただきますよう。あたしは、第一に大河内さん。それから……、二番目は、都夜子さんね。優等生ぶった発言が、さつきから鼻に付くのよ！」

高椿子爵「ふふふ……、みなさん、だんだん本音が出てきましたねえ。

ところで、わたしの意見ですが、みずからの正体を告白された勇氣ある方々には、今日の処刑を行うべきではない、と考えます。すなわち、片想い告白をされた琴音さんと、探偵告白された志乃さんについての処刑は絶対に避けるべきです。さらに、村人宣言をした書生さんも、まあ、今日の処刑を無理をして行う必要はない、と考えます。

さて、残った八名の人物。その中には、このわたしも含まれておりますが、天文家を誤って処刑することだけは、何としても避けねばなりません。だから、万が一、天文家が処刑されそうに議論が進行した場合には、やむを得ませんから、天文家の方は正直に正体を明かしてください。もちろん、そうはならなくて、天文家が潜伏しているのが、一番理想的なのですがね。

そして、わたしが処刑投票しようと思っっている人物は、まずは大河内君ですね。現時点で最も黒っぽく思われます。そして、二人目

の候補をあげるといわれるのなら……、蠟燭職人の菊川さんです！
中尉がおっしゃる通り、あらゆる言動が場を乱そうとしているように思えます」

令嬢が申し訳なさそうに割り込んできた。

令嬢琴音「本音いうと、大河内はうちの大切な執事やからね。殺されちゃうと、うちとしては、困っちゃうんよ……」

行商人猫谷「俺の意見をいわせてもらう。処刑の第一候補はやはり大河内君だ。このまま、弁解がなければ、おそらく彼の処刑は確定的となるだろう。だから次の候補をあげるといわれても困るが、あえていえば……、そうだな、高椿のお坊ちゃんつてとこかな。ちょっと、仕切りの手際が上手すぎるのが……、まあ理由だな……」

すると、ずっと押し黙っていた青年執事が、肩で大きく息をした。執事大河内「ここまで追い込まれば仕方ありませんね。今日の告白は極力避けようと思っていました……。みなさん、本日、わたくしを処刑なさってはなりません！ わたくしの正体は、探偵です！ これまで伏せておいたのは、今晚の吸血鬼による襲撃を怖れたからです。しかし、処刑されてしまつては元も子もございません！」

この驚くべき発言には、さすがにあちこちからざわめきが湧き起こつた。

霊媒師鈴代「おぬし、今になって、何を勝手なことを！ みな衆、惑わされてはいかんぞ！ 追い込まれたうさぎの、苦し紛れの戯言ざれごとじゃー！」

執事大河内「どう取られようと仕方ございませんが、わたくしをたつた一日だけでもいい、生かしていただければ、わたくしが真実を語っておりますことがた易く証明できると存じます。探偵のお仕事は、真の探偵にしかできません。探偵を騙かたれば、きつとそのうちにボロが出ることでしょう。そうですね、七竈の女将さん……？」

女将志乃「面白いわ。そのお言葉、そっくりあなたにお返ししますよ。執事さん」

行商人猫谷「これは、これは……、探偵告白が二人になつちまつた

ぜ。いよいよ、面白いことになってきたな。しかし、大河内君が探偵宣言をしてしまうと、本日の処刑者を誰にするのか、もう一度はじめから検討し直さなければならぬな」

令嬢琴音「どうするの？　もうすぐ夕刻よ。うちたちが決断する時が迫ってるんよ」

蠟燭職人菊川「それでは、自分の意見をいわせてもらおう。ここにきて我々は、片想いと探偵と称して、すでに三人の人物が名乗りをあげてしまっている。実に遺憾いかんなことだ。彼ら三人のうちの誰かが、今晚の吸血鬼のあわれな餌食となってしまうであろう！　初日から特殊能力者が宣言するのは、村側にとって極めて危険な行為だ。しかしながら、それをさりげなく促した人物が、この十一人の中に潜んでおる。もう、おわかりだろう。そう、高樫子爵である！　彼こそが、このような危機的状态を招いた張本人なのだ。自分は高樫子爵こそ、今宵の処刑すべき唯一の人物であると思う。そして、探偵と宣言した以上、信用するしないにかかわらず、本日の大河内青年の処刑は撤回すべきだと思う！」

高樫子爵「これは、これは……。このわたしが標的にされるとは夢にも思っていないかったですよ。大河内君が探偵宣言したのは、単に追い込まれただけである可能性もあります。探偵宣言をするならば、志乃さんが探偵だと宣言された直後に反論するのが筋なのに、ここまで引き延ばした彼の主張は、全くあいまいなものですよね。されど、本当に探偵であるならば、今日処刑するわけにはまいりません。探偵の告白が對抗してしまいましたから、まずは天文家の方をお願いしたい。探偵宣言をされた志乃さんが大河内君のどちらかを、今晚、必ず観測していただきたい。少なくとも一人はうそつきであることが確定ですからね」

後家都夜子「子爵さまは、お二人のうちのどちらを観測して欲しいと考えておられるのですか？」

高樫子爵「それは天文家の判断にお任せします。わたしがここで指定すれば、吸血鬼たちの行動に影響を及ぼすからです」

女将志乃「天文家の方にいいことがあるわ。今晚見張るのは大河内さんがお勧めよ。あたしを見ていても白であることが判明するだけよ。大河内さんはおそらく吸血鬼ね。彼を夜中に見張っていれば、きつと空に飛び立つお姿が観測できるわ」

後家都夜子「わたしは正体を告白された、琴音さん、志乃さん、大河内さん、そして和也さんの処刑は避けるべきだと思います。そうになると、第一候補は、申し訳ありませんが、高椿子爵さまとなってしまいます。わたしは初日からの役職の告白に関しては、基本的に反対でした。だから、子爵さまの積極的なあぶりだしの示唆には、納得がまいりません。それから、次の候補は土方中尉さまです。彼も役職の告白に積極的でした。だから、わたしの視点からはどうしても黒つぶく思えてしまいます。いずれにせよ今宵の投票では、子爵さまに入れる予定です。天文家には、志乃さんを観測していただきたく思います。理由は、志乃さんが味方であることがはつきりすれば、村側にとって心強く思うからです」

令嬢琴音「うちも、まず子爵さまが怪しく思うわ。それから、次に怪しいのが小間使いの葵子！ 大人しそうな仮面の下で何を考えとるのか、ぜんぜんわからんのよね」

霊媒師鈴代「うむ……。そういうことなら、今夜血祭りにおけるのは子爵じゃー！」

行商人猫谷「琴音お嬢さまから、直々に子爵の吊し上げの申し出があったということ、子爵はお嬢さまの恋慕のお相手ではない、ということでしょう！ それなら、俺も安心して子爵の坊ちゃんに投票させてもらいますよ。次点は、後家の別嬪さんといったところかな。これについては、特に強い根拠はないよ……。令嬢のお相手を間違つて殺しちゃいけないから、吊るすなら女性になるのかなという程度だ。気にしないでくれ……」

土方中尉「ふむ、令嬢の恋慕先も注意せねばならぬということか……。余は、蝋燭師を一番手にしたいと思っておったが、それならば、申し訳ないが、一番手は高椿子爵とさせてもらう。二番手は蝋燭師

だ」

小間使い葵子「わたくしは、ご主人さまを信じたく存じます。ですから処刑投票先は、女性から選べということになりますと……、役職宣言された方は除かなければなりませんから、わたくしと鈴代さま、都夜子さまということになってしまいますね。わたくし自身を推挙することはありえませんが、申し訳ありませんが、一番手は鈴代さま、二番手を都夜子さまとさせていただきます。ああ、どうしましょう……。何ら根拠のある意見ではございませんので、発言自体がはばかられます。本当に申し訳ございません」

高椿子爵「どうやら、わたしが黒であるということと議論が進んでしまっているようですな。みなさんがわたしを推挙する理由が、特殊能力者の積極的なあぶりだしということでした、能力者を間違つて処刑してしまうリスクと、初日の議論が停滞して時間が無駄に過ぎていくことの方が、わたしは不利益だと考えます。依然として、わたしが今日とつた行動は、最善を尽くしたものだと思っております。

さて、とはいっても、このままむざむざ殺されるわけにもありませんので、告白させていただきます。わたしは天文家であります！　ここまで隠してきたのは、もちろん天文家が名乗り出るメリットがなかったからであります。ですから、今宵、わたしを殺さないでいただきたい」

行商人猫谷「いまさら、そんな手に乗るかよ！　坊ちゃん、悪あがきも甚だしいぜ！」

土方中尉「しかし、子爵殿が天文家宣言したからには、今夜の処刑は避けねばならぬな……」

行商人猫谷「おいおい、将校まで可笑しなことをいい出しやがる。そんなことなら全員が能力者宣言をすればいいってことになつちまうよ。血迷つちやなんねえ！」

蠟燭職人菊川「猫谷のいう通りだ。子爵の発言はその場逃れのいいかげんなものに過ぎない。自分は依然として子爵を推挙する！」

霊媒師鈴代「そうじゃな。いまさら、いいわけしても手遅れじゃ！」と、あくびをしながら霊媒師が頷いた。

土方中尉「子爵が候補から外れると、次に立場が苦しいのはあんただからな……」

霊媒師鈴代「何をいうか！ わしは、確信をもって子爵さまを推挙しておるのじゃ。おのれ、ひよつこの分際で……」

書生和也「僕も、子爵の突発的な意見に惑わされてはならないと思います。やはり子爵は黒であつて、最後のあがきで天文家をあぶりだそうとしているように思います。仮に、子爵が天文家でなければ、この中にいる真の天文家の方には、子爵の発言が虚偽であるとわかつているわけですが、当然、今ここで、それを暴露することはできません。それこそ、子爵の思つつばだからです。したがって、僕が処刑すべきと思う人物は、一番手が高椿子爵です。二番手は、怪しいと思うのは大河内君ですが、琴音さんの想い先である可能性も考慮すると、はばかりながら女性から選ぶ方が賢明ですね。そうとなれば、鈴代さんですね。さつきから、根拠のないことで僕を何度か攻撃されていますが、その言動のいいかげんさがいかにも黒っぽく感じ取れるからです」

女将志乃「あらあら、子爵さまも大変なことになつちやつたわね。あたしの意見はいうまでもなく、あたしに対抗している大河内さんですけど、この流れじゃ、処刑は子爵さまになつてしまいそうですね。ええと、ここまでの発言によると、みなさんが予定されている処刑先の一番手は、あたしは大河内さんで、子爵さまを推挙しているのが、猫谷さん、和也さん、菊川さん、琴音さま、都夜子さん、鈴代さん、それに中尉さまよね？」

土方中尉「うむ、少々血迷っていたようだ。余も当初の発言通り、子爵を一番手といたす」

女将志乃「そして、小間使いが鈴代さんを推挙しているわね。さて、あと意思表示していないのは、子爵さまと大河内さんよ。発言してもらおうじゃないの」

執事大河内「わたくしめも、自分が処刑されることは本意ではございません。ですから、申し訳ございませんが、高椿子爵さまを一番手に、二番手はわたくしの職業を騙っていらっしやる女将さんです！」

子爵は、観念したかのように大きくため息を吐いた。

高椿子爵「わたしから見ても黒らしき人物は、蠟燭職人の菊川さんです。彼は、巧みにわたしを血祭りに誘導しました。どうやら、今宵、わたしは処刑投票に選出されてしまうでしょう。全く、見事です。二番手は申し訳ありませんが、鈴代さんとさせていただきませう。鈴代さんを選んだのは、お嬢さんの想い先の誤処刑を避けるためであります。」

死を直前にして、いろいろ名残なごりはありますが、わたしの無念は遺言に記載しておきますので、探偵の方に正確に確認してもらつことを願います」

猫谷が子爵の肩をそつと叩いた。

行商人猫谷「あんたの無念はよくわかったよ……。さて、もうすぐ投票の時刻だな。他に意見のある奴はいるかい？」

6・恐怖の夜（初日、夜）

こうして初日の議論は幕を閉じ、僕たちは処刑される者を決める投票を行った。投票は無記名で行われ、白票は禁じられている。僕は、宣言通り高椿子爵に投票した。投票は滞りなく行われ、開票された。結果は、高椿子爵に八票、大河内青年に一票、鈴代に一票。菊川に一票が投じられていた。そして、夕刻に子爵の処刑が執行された。子爵の心臓に、聖なる杭が撃ち込まれた。

間もなく、吸血鬼が活動を始める夜になる。吸血鬼は村人の中から思い思いの目標を、每晚襲うことができる。十一人の中に吸血鬼は二人いた。もし、僕たちのもくろみ通り、子爵が吸血鬼であれば、残りの吸血鬼は一人であるが、そうでなければ、二人が生き残っていることになる。

夜間の吸血鬼たちの攻撃方法には、二つの選択肢がある。二人が同時に一人の人物に襲いかかれば、相手は失血死する。また、二人がわざと別の人物を襲うことも可能だ。その際には、ランクが上位の吸血鬼、すなわち吸血鬼Kに襲われた人物だけが、吸血鬼に感染してしまう。感染した人物は、翌朝になっても見かけはぴんぴんしており、感染しているという自覚症状はない。感染しても彼らの本来の意志は変化しないので、村人であれば村側の勝利を目指し、使徒であれば吸血鬼側の勝利を目指す。しかし、感染した人物は、生きている村人としては数えられない。そして、感染していない村人（ここでは使徒も含まれる）の総数が、生き残っているオリジナル吸血鬼の総数以下となれば、その瞬間に吸血鬼側の勝利が確定する。山奥にある鬼夜叉村は、夜になれば漆黒の闇に覆われてしまう。しかも今晚は新月だ。そんな中、生き残った吸血鬼が行動を起こした。

そして、憐れな犠牲者が生まれてしまった……。

7・令嬢の想い先（二日目、日中）

翌朝、布団の中で無事に眼が覚めたことに、僕は安堵した。まだ生きている……。こんな村から一刻も早く逃げ出したいのはやまやまだが、唯一の脱出路はがけ崩れで閉鎖されている。

くよくよしても仕方がないので、僕は階下に降りることにした。志乃さんは食事の仕度をしていた。

書生和也「志乃さん……。無事でしたか。よかった……。本当によかったです！」

女将志乃「朝から変な人ね。まあ、こんな時だから、そういわれても仕方ないけど……」

しばらくすると、猫谷が大あくびをしながら、二階から降りてきた。

行商人猫谷「おおつ、美味あじそうだな。おや、みなさんお揃いそろで……。どうやら、ここにいる俺たちは、無事だったようだな。結構、結構

女将志乃「さあ、みなさん、食べ終わったら、また村長の館に集合よ。今日も議論をしなければなりませんからね」

僕たちは食事を早々に済ませると、村長の館へと出向いた。そこには生き残った村人全員が集まっていたが、その数は全部で九名となっていた。

令嬢琴音「みなさん、お集まりいただき感謝するわ。でも、悲しい知らせがあるんよ。実は、昨晚、処刑された高樫子爵さまの他に、さらにもう一人犠牲者が出してしまったの。その方のお名前は……。うちの忠実なる執事であった、大河内毅です……。そういつて、令嬢は両手で顔をおおった。

行商人猫谷「というと、大河内君は亡くなってしまったということですね？」

女将志乃「あらあら、よりによって犠牲者が大河内さんとはね……。せつかく、今日、彼が探偵でないことを、暴いてさしあげようと思つていたのに、残念だわ……」

蠟燭職人菊川「大河内青年の死因は、失血死ということか？」

令嬢琴音「さあ？　うちは医者じゃないんで、詳しくはわからへんよ」

後家都夜子「それなら、いよいよ探偵の出番じゃないですか？」

小間使い葵子「待つてください。探偵は一日に一人だけの調査しかできません！　昨晚の犠牲者は二人。どなたを調査していただくのですか？」

行商人猫谷「つまり、どちらの犠牲者を調査してもらうかを、俺たちは真つ先に議論しなければならぬということだ。そういうことだから、お志乃さん、調査を早まってしないでくれよ」

女将志乃「わかったわ。どっちを調査して欲しいの？」

蠟燭職人菊川「自分は子爵殿の調査を希望する。彼が鬼であれば、一安心できるからな」

土方中尉「余も子爵の調査を望む。いずれにせよ大河内青年は吸血鬼たちの犠牲者なのだから、彼が吸血鬼である可能性はゼロだ！」
行商人猫谷「いわれればその通りだ。青年執事の死はどう考えても失血死しかあり得ない。一回しかできない本日の調査を有効に使うためには、どうやら子爵の調査が賢明のようだな……」

小間使い葵子「みなさま、ご異論はなさそうですね。それでは、探偵さま、ご主人さまのご遺体を調査してくださいませ」

女将志乃「じゃあ、それでいいのね？　調査をはじめるわ……」

しばらくの間、沈黙が流れた。やがて、志乃はゆっくりと顔をあげると、こちらを向き直った。

女将志乃「わかったわ。残念だけど、子爵は村人よ。そして彼は、片想い、探偵、天文家のいずれでもないわ……」

報告を受けた村人は、しばらくの間、凍りついていた。やがて、

将校が申し訳なさそうに言葉を発した。

土方中尉「まさか……、そうであったのか。すまぬ、子爵殿……」
霊媒師鈴代「そうれ見よ。わしは最初から、子爵さまは白だと思っ
とったのじゃ！ やはり、怪しき奴は、この書生なのじゃ！」

蠟燭職人菊川「早合点してはいかん。七竈の女将の調査は、子爵が
特殊能力を持つ村人でなかったと主張しているだけであつて、彼が
使徒でなかったとは断言しておらぬからな！」

書生和也「子爵が使徒であつたかどうかを、探偵が判断することは
できないのですか？」

女将志乃「どうやらそのようね。あたしの調査結果では、子爵さま
が『能力を持たない村人である』としか判断できないみたいだわ。
そして、使徒も能力を持たない村人だから、子爵さまが白の村人な
のか、使徒なのかまでは、わたしにはわからないわね」

小間使い葵子「いずれにしても、吸血鬼が二人とも健在であること
ははっきりしましたね」

後家都夜子「探偵さん。子爵さまのご遺言はどうなっているの？」
女将志乃「遺言の調査はもう一日かからないと無理ね。明日、あた
しが生存していたら、子爵さまの遺言を、みなさんに公開できるは
ずよ」

書生和也「わかりました。明日まで待てば、子爵の遺言を知ること
ができるのですね」

行商人猫谷「それじゃあ、今日の議論はどうするね？」

小間使い葵子「まだ、報告は完全に済んではおりません。片想いの
琴音お嬢さまに、想い先の感染の有無を報告していただかないと…

…」

行商人猫谷「ええと、子爵の坊ちゃんは犬死にで、執事の青年は失
血死だったよな。だったら、他に感染しているものなど、理屈の上
で、あるはずないじゃないか？ 吸血鬼は、一晚に二人の犠牲者を
同時に出すことはできないだろう」

小間使い葵子「お言葉ですが、わたくしは、お嬢さまに質問いたし

たのでございます」

令嬢琴音「うちの憧れのお方は健全やわ。このゲームでの特殊能力者は、天文家と探偵と片思いや。だから、夜に死人が出れば、猫さんのいうた通り、原因は失血死しかありえんとちゃうの？」と、令嬢が少しムツとしながら答えた。

書生和也「まあまあ、葵子さんは、琴音さんから直に意見を聞きかけたのだと思いますし……」

女将志乃「そのようね。この議論はこれくらいでいいかしら？ それじゃあ、次は天文家の告白ね。一日たったからもういいでしょう。天文家は、今、ここで名乗り出なさいよ！」

土方中尉「そうだな。天文家は、昨晚、誰かを観測していることだし、ここでその報告をしてもらわねばならぬからな」

小間使い葵子「しかし、吸血鬼はまだ二人健在です。天文家の方には、もう一日潜伏していただいてもよろしいかと……」

霊媒師鈴代「なにをいっておる！ 少しでも情報があるなら公開してもらわねば、夜もおちおち寝られぬではないか！」

行商人猫谷「おいおい、あんた、予知能力を持っているんじゃないのかい？」と、猫谷があきれ顔でいった。

土方中尉「余は天文家の告白に賛成である。だから、宣言させてもらう。余には天文観測をする趣味はない！」

蠟燭職人菊川「ちょっと待て！ 現時点での天文家の公開は村側にとつて明らかに不利益だ。だから、もう少し話し合いが必要だ。そして、そのためにも勝手な告白は自粛してもらいたい。たとえそれが、自分は天文家ではないという告白であつてもだ！」

小間使い葵子「みなが勝手に天文家でないと告白してしまえば、逆に天文家があぶり出されてしまうからですね？」

蠟燭職人菊川「その通りだ」

令嬢琴音「それもそうね。すでにうちと女将さんは天文家でないことを告白しているのだし、中尉さまが否定されてしまったから、天文家の候補は六名に絞られているのね」

行商人猫谷「しかしだなあ。吸血鬼はまだ二人とも生き残っているのだから、天文家が昨晚の観測で吸血鬼を見つけ出しているのなら、それは告白すべきだと思っぜ。天文家が明日まで生き残っているという保証はないのだし！」

だから、俺は宣言させてらう。もし俺が天文家であつたならば、俺は昨晚、吸血鬼が飛び立つのを目撃してはいない！ これは真実なる発言だ！」

令嬢琴音「猫さん、あんまりややこしい表現をせんで欲しいわ？」

うちには、何をいいたいんか、さっぱりわからんのよ」令嬢は、ムツとしていた。

小間使い葵子「ふふふっ……、適切な発言ですよね。みずからが天文家であると宣言することなく、天文家であつたなら吸血鬼を観測していない、ということ表現しています。わたくしも同じ宣言をさせていただきますわ。つまり、もしもわたくしが天文家であるならば、わたくしは昨晚、吸血鬼を観測してはおりません」

霊媒師鈴代「わしははつきりいわせてもらうぞ。わしは天文家ではない！ そんなことせずとも、未来を知ることにはできるからのう」後家都夜子「天文家が昨晚、吸血鬼を観測しているのに、依然として潜伏を望んでいるなんてことがあるかしら？」

蠟燭職人菊川「ある意味で賭けとなつてしまつが、潜伏すること吸血鬼のターゲットにならないというメリットはある」

書生和也「しかし、死んでしまつては元も子もない。だから、僕は天文家の方が、もし昨晚、吸血鬼が飛び立つのを観測されているのなら、正直に公開してもらいたいと望みます。ということ、僕も宣言いたします。もし僕が天文家であるならば、昨晚、吸血鬼を観測してはいません！」

土方中尉「天文家に関するコメントをしておらぬのは、残りは都夜子と菊川氏だ。お二人には何某かのコメントをいただきたいのだが」蠟燭職人菊川「自分は天文家に関して、語ることは何もない！」

後家都夜子「わたしもノーコメントとさせていただきます」と、都

夜子も怒った口調で答えた。

行商人猫谷「わかったよ。仮に、あんたらのうちどちらかが天文家であって、なおかつ、昨晚、吸血鬼を目撃していたとしても、現時点ではまだ名乗り出たくない、ということかもしれんからな。

しかし……、これで、俺たち村側は、増々追い込まれちまったな。吸血鬼は二人とも健在、そして、その手がかりは皆無、ということだからな」

女将志乃「さて、そろそろ、嫌なお話をしなければならぬわね。今晚の処刑者は誰にいたしましょうか？」

土方中尉「当然、非能力者の女から選ぶべきであろう。つまりお嬢さんの想っている男を処刑してしまうと、お嬢さんも後を追ってしまうからな」

霊媒師鈴代「待て待て、とんだ戯言じゃ！ 非能力者を謳^{うた}っておるおなごというたら、このわしと、都夜子と、小間使いの三名しかおらんではないか！」

行商人猫谷「それもそうだな。お嬢さまよ、あんたが殺されても文句をいわない男がいたら、宣言してもらっても構わないぜ。さもないや、処刑者はさっきの三人から選ばれちまうぜ！」と、猫谷が含み笑いをした。

令嬢琴音「うちの想うお相手は、秘密なんよ……」

後家都夜子「わたしからいうと、変に勘ぐられる怖れがありますが、いわせていただきます。処刑の候補者は、男女関係なく、それぞれが一番怪しいと思う人物をあげるべきです。もし、候補にあげられた人物が片想いのお相手であった時には、片想いさんがお相手のお名前を告げるべきです」

令嬢琴音「そんなことしたら、うちの大切なお方が、今日の処刑は免れても、今晚、吸血鬼たちに襲われて失血死してしまうやないの！ そやったら、うちも後を追ってしまうんよ！」

後家都夜子「その通りです！ でも、そうなればわたしたち村側は、明日、天文家と探偵の両名が健在の状態、吸血鬼側と戦えるので

す！」

書生和也「確かに、吸血鬼は二人しかいませんからね。もしも吸血鬼が誰なのかがわかってしまえば、彼らの処刑は二日あれば片が付きます。都夜子さんのおっしゃる通り、自分が純粹に怪しいと思う人物をあげて、議論していくべきだと思います」

小間使い葵子「それに、片想いのお嬢さまがお相手を告白してくださいれば、その瞬間に、わたくしたちは確実に白である人物を、二人も確認できるわけです。白である人物の発言は全てにおいて信用できますから、わたくしたちにとってその情報は限りなく有益です。

琴音お嬢さまには、いずれ都合の良いタイミングで、想い先を告白なされるのがベストだと思います」

行商人猫谷「なるほどね。あんた小間使いのくせに、なかなか頭がいいみたいだな。殺されちまってからでは、死人に口なしだからな」と、猫谷が感心していた。

女将志乃「天文家は、今日は名乗り出ないのかしら？ 告白によると、天文家であることを否定している人物は、あたしと琴音お嬢さま、土方中尉さま、それと鈴代さんの四人ですね。子爵さまは調査によって天文家でないことが判明したし……、そういえば、和也さんも自分はただの村人だとおっしゃったかしら？ それから、亡くなった大河内さんも吸血鬼でないことは確実だけど、昨日の話からすると、彼が天文家である可能性は極めて薄いわね」

書生和也「でも、もしかしたら……、大河内さんは実は天文家であつて、処刑候補になりそうな時点で、天文家であることを告白しようと思っただけ、そうすれば吸血鬼たちの餌食になるのは確実であつた。したがって、仕方なく、自分は探偵である、と宣言した、という可能性は考えられませんか？」

女将志乃「和也さん……。そんないい方をされると、あなたが天文家ではないように、みなに思われちゃうわよ……」

書生和也「もういいでしょう。僕はただの村人ですよ。今、宣言します！」

女将志乃「あら、そうなの！　ということ、天文家の可能性のある人物は、猫谷さん、菊川さん、葵子さん、都夜子さんの四人に絞られちゃったわね」

蠟燭職人菊川「いささか、乱暴な推理だな。銘々の発言が全て真実であるとは限らんぞ。例えば、和也君だ。村人だと宣言するメリツトは、少なくとも村側にとっては何も無いはずだ。彼が吸血鬼というのなら話は別だが……」

七竈亭の女将が、焦れるようにして、上ずった声を張りあげた。女将志乃「はつきりいいなさいよ。和也さんがあなたの処刑候補ということなの？」

蠟燭職人菊川「それなら、いわせていただく。自分が考える処刑すべき一番手は、飯村和也である！」

包帯の奥に隠れた菊川の冷たい眼光が、突き刺すように和也に向けられていた。

8・今宵、処刑すべき者（二日目、日中）

志乃は努めて冷静に振る舞っていた。

女将志乃「菊川さん。候補者は二人あげてくれないとだめよ。和也さんが一番手なのはわかったけど、二番手は誰なの？」

蠟燭職人菊川「そうだな。じゃあ、二番手は、行商人猫谷だ。さりげなく議論の場を支配しているところが、気になる。まあ、あえて二番手をあげる、といわれたからあげただけだが……」

霊媒師鈴代「それなら、わしもいわせてもらおう。今宵処刑すべきは、書生以外には考えられぬ。しかし、二番手をあげよといわれれば、そうじゃの……、大人しそうにしておる女狐めぎつねの都夜子じゃな！」

書生和也「それでは、僕も宣言させていただきます。処刑候補の一番手は、鈴代さんです。彼女の意見は、全く持って、いい加減で不愉快この上なきものです！そして、二番手は……、申し訳ありませんが、小間使いの葵子さんをあげさせていただきます。理由は、琴音さんの想い先であることではないので、誤って琴音さんを後追い自殺に追い込む心配がないこともあります。これまでの葵子さんの意見は、いずれも聡明で鋭いものです。ただ、その鋭さに隠れて、彼女は自分の本音をずっと隠し通しています。自分の考えを公開しないでいるところに、僕は怪しさを感じるのです」

小柄な小間使いが、寂しげな様子で小さくため息を吐いた。

小間使い葵子「本音をいえとおっしゃられても、今のところ、情報が乏しすぎます。だから、今日の投票は、ある程度勘に頼らざるを得ません。ということ、一番黒っぽいとわたくしが感じる人物はどうしても、猫谷さまとなってしまう。理由は、さきほど菊川さまがおっしゃったように、会話の要所要所で猫谷さまのご意見は、影響力が大きかったように感じるからです。ただ、それだけの根拠でしかありません。二番手まであげなければならぬのです。ああっ……、困りましたわ。それでは、昨日と同じく、都夜子さまに

させていただきます。都夜子さまには、引き続き申し訳なく思っておりますが、他のみなさまに決め手となる事実がない以上、琴音お嬢さまのお相手を外すというだけの理由です」

後家都夜子「葵子さんのお気持ちはお察しいたしましたわ。では、わたしの意見を申し上げます。わたしには、鈴代さんが一番怪しく感じられます。理由は、発言が一方的で信用できないからです。でも、葵子さんと同じく、判断材料があまりにも乏しくて、これといった人物が他に思い浮かびません。敢えてあげるというのでしたら、二番手は昨日と同じく、土方中尉さまにさせていただきます」

土方中尉「余が疑われてしまうとは、真に遺憾である。では、余も意見を述べさせてもらおう。まず、白であると宣言している女将とお嬢さまは、今夜の処刑からは除外すべきである。さらに、書生の発言は、計算された演技ではなくて本音を語っている、と余にはみえる。したがって現時点では、余は書生も白であると判断している。小間使いの発言は、常に的確で、村側にとって益あるものである。余は小間使いも白であるように思う。そして、残りの四人、行商人、蠟燭師、霊媒師、未亡人については、いずれも白であるという決め手がないので、灰と判断せざるを得ない。その中でも、蠟燭師と霊媒師は、さまざまな発言から、より黒っぽい感じを受ける。お嬢さまのお相手を避けるという可能性も考慮すれば、一番手は霊媒師鈴代にせざるを得ない。二番手が蠟燭師菊川とさせてもらおう」

女将志乃「あたしは今のところ、小間使いが一番で、鈴代さんが二番手かな？」

行商人猫谷「俺も、一番は小間使いで、二番目は鈴代だな。正直なところ、あまり強い理由はない。まあ、お嬢様のお相手を避けるという理由だけだな。何か他に決め手となる意見があれば、変えることもいとわねえが……」

令嬢琴音「残りはうちなん？　そうやねえ、まあうちのお相手をいうわけにもいかんし、今日のところは女性から選ぶ方がよさそうね。

さあて、どうしよっかなあ……。まあ、やっぱり小間使いが一番手

やね。それから、そんな次は都夜子さんにしとくわ。正直、誰があやしいんか、ほんにわからんのよ……」

女将志乃「さて、今のところのみなさまのご意見を集約すると、処刑の第一候補として鈴代さんを推挙するのが、土方中尉に和也さんと都夜子さんの三人ね。それから、小間使いを押し出したのが、あたしと猫谷さんとお嬢さままで同じく三人。さらに、鈴代さんと菊川さんの二人が、和也さんを推挙していると……。ああ、それから小間使いは猫谷さんっていったわね」

霊媒師鈴代「待て、待て、待ってくれ……。このままではこのわしが処刑されてしまう！ わしは鬼ではない！ お願いじゃ、殺さないでくれ。わしは……。実は天文家じゃ！ わしを処刑してはならぬぞー！」

女将志乃「あらまあ、ついに天文家であらせると白状されましたわよ。追いつまされてから天文家を騙る鬼は、よくいるけど……」

霊媒師鈴代「嘘ではない！ もし疑うのなら、対抗者が出てもよいはずじゃ。どうじゃ、天文家であると名乗るものが他におるのか？

おりやあせんじやろう！ すなわち、わしこそが真の天文家だということじゃ！」

書生和也「鈴代さん。あなたが天文家であるというのなら、昨晚の観測結果を報告してください！」

霊媒師鈴代「なんじゃと？ よかろう！ わしが昨日見張っておったのは、そなたじゃ。そして、わしは見た！ そこにおる書生は、夜に大河内を襲いに飛んで行ったわ！」

書生和也「そんな……。まったくのでたらめだ！ みなさん、信じないけませんよ！」

後家都夜子「鈴代さんのただ今の発言は、口から出まかせとしか思えませんが、もしも、和也さんが飛び立つのを見ていたのなら、もっと早くから事実を告白されたはずですよ！」

行商人猫谷「俺も同感だな。往生際が悪いぜ」
女将志乃「もうひとりの有力候補の葵子さん、何かいいたいこ

とある？」

小間使い葵子「怖れながら申し上げますが……、わたくしは白でございます」

女将志乃「それだけでいいの？　じゃあ、そろそろ夕刻ね。投票に入りましょうか？」

土方中尉「ちよつと待て。今晚の天文家の見張り先の議論をしておらんぞ」

行商人猫谷「とはいっても、肝心の天文家は名乗り出てないしな……」

女将志乃「あたしが見張つて欲しいのは、和也さんよ！　なんだかんだで、とにかく白黒をはつきりさせてもらいたい人物よね」

小間使い葵子「待つてください。今晚の観測先は、天文家の方に一任してよいのでは……。理由は、ここで観測先について議論すれば、鬼に何がしかの手がかりを与えてしまつように思えるからです」

土方中尉「余たちがここで議論することで、逆に村側の不安要素を明確にする怖れが生じるといふことか。なるほど……」

令嬢琴音「とにかく、天文家さんは、明日になったら正体をさらして欲しいわ。生きていければの話だけど……」

小間使い葵子「そうですね。天文家の方が告白されるのは、明日が良いタイミングだと、わたくしも思います」

行商人猫谷「それじゃあ、今日の議論は打ち切りだ。さっさと投票を始めようぜ」

9・まぶたに浮かぶ美女（二日目、夜）

こうして二日目の日中は過ぎ、生き残り九人による運命の投票が行われた。しかし、結果は大方の予想に反して、鈴代に六票、葵子に三票　　が投じられていた！

空はため息が出るほど鮮やかな茜色の夕焼けだった。霊媒師鈴代の胸に、聖なる杭が打ち込まれ、二日目の処刑は滞りなく執行された。

時は、そろそろ亥の刻（午後九時から午後十一時まで）になるだろうか？　僕は七竈亭の客間で一人寝転んで、広々とした天井の木目を数えていた。小さなテーブルの上にポツンと置かれた蠟燭の炎が、ゆらゆらとくすぶっている。徐々に、僕は思考に耽^{ふけ}っていた。今宵、僕はここで、招かざる訪問者によって殺されてしまうかもしれない。僕は北側の障子に目をやった。鍵がかかる部屋ではなし。逃げる場所はどこにもない……。

くよくよ悩むのは止めよう。僕はもう一度、これまでのゲームのやり取りを再検討することにした。まず気になるのは、いまだに天文家が名乗り出ないことである。天文家の情報は、ゲームが進行すればするほど、信憑性^{しんぴんせい}が薄くなる。なぜ黙っているのだろうか？　ひよっとして、すでに天文家は死んでしまっているのだろうか？　もし、そうだとすると、村側の勝利は限りなく厳しい。

都夜子さんの優しい笑顔がまぶたの裏に浮かんでくる。彼女だけは何が起こっても信頼したい。失った亭主とは、どのような人物だったのだろうか？　まだ彼女はそいつに未練を残しているのだろうか？

夜が明けた。あろうことか、僕は生きている！　裏を返せば、どこかに別の犠牲者が？　都夜子さんは無事なのだろうか？

今日も村長の屋敷に集合だ。正直いつて、あまり行きたくはないが、仕方ない。梅小路と大きく刻まれた石板の表札が掛かった華々しい門をくぐり、急な石段をのぼっているところで、後ろから女性の声があった。

「あら、和也さんじゃないですか。ご無事でよかったです……」

振り向くと、浅葱色の着物を纏った都夜子さんの姿があった。彼女は、遠慮もなしに僕の真横にやってきて、小さな顔で見上げるように、にこりと微笑んだ。背中まで伸びた美しい黒髪からは、ほのかに椿油の香りが漂ってきた。彼女は僕に衣類が触れるかどうかの距離まで、細身の身体を擦り寄せてきた。彼女の温もりが伝わってきて、僕の心臓がドクンと鳴った。わずかに開けた胸元のすき間から、綿雪のような白い素肌が見え隠れしていた。

「今日も嫌な話し合いをしなければなりません」と、僕の視線の矛先に気づく様子もなく、都夜子さんはほのかなため息を吐いた。

「邪悪に屈してはいけません。いっしょに力を合わせて、村を守り抜きましょう」

ほんの弾みであったのだが、気が付くと僕はかよわげな彼女の手をギュツと握りしめていた。都夜子さんは頬を薄紅色に染めて、恥ずかしそうに、はい、と一言だけ口にした。

令嬢琴音「みなさん、今日もお忙しい中、足を運んでいただいて感謝するわ。昨晚に亡くなった方の確認ですけど、まず処刑された霊媒師宮田鈴代さん、それにもう一人……。菊川六郎さんのご遺体が、ご自宅で発見されました」

土方中尉「なんと……。蠟燭師が殺されたのか？ 死因は無論失血死だな？」

令嬢琴音「まあ、それが妥当な解釈やね……」

行商人猫谷「論理的に考えて、失血死ということになる。ところで鈴代さんが吸血鬼だとすれば、残りの鬼は一人だが、一人になった吸血鬼が村人を襲った場合、村人はどうなってしまうんだ？ たしかルールでは、吸血鬼の片方に襲われれば感染する、と書いてあったような気がしたが……？」

土方中尉「何？ もし、それが真実なら、蠟燭師の死因が説明できなくなるではないか！」

小間使い葵子「吸血鬼が二人いる場合に、二人が同時に一人を攻撃すれば、被害者は失血死となり、別々に襲い掛かれれば、上位吸血鬼に襲われた被害者が感染します。」

しかし、吸血鬼が一人となれば、襲われた被害者は無条件で失血死となります！」

土方中尉「ふむ、それは真であろうな？」

小間使い葵子「はい、ルールブックにそのように記載されています。」

土方中尉「そういわれてみれば、なるほど、書いてあるな。ありがとう、重要なルールを確認することができた。」

書生和也「二人いる時には、単独では感染させる能力しかないのに、一人になると、単独で失血死できるようになる、というのですね。考えてみると妙な話ですね。」

小間使いは、小振りな左の手を口もとに当てて、くすりと笑った。小間使い葵子「そうですね。吸血鬼は一人になってしまえば、『感染させる』という選択肢を失うことになります。」

女将志乃「それじゃあ、あたしが今日調べる死体は、誰にすればいいの？ 昨日亡くなった大河内さんも含めて、候補者は三名いるけど……。」

行商人猫谷「大河内君と、鈴代さん、菊川氏の三人だね。菊川氏が天文家かどうかの確認はしておきたいが、やはり鈴代さんの確認が優先だろう。彼女が吸血鬼であれば、俺たち村側は、大きく勝利に前進したことになるからな。」

後家都夜子「わたしも鈴代さんの調査をしていただきたく存じます。最も吸血鬼でありそうに思えるからです」

小間使い葵子「そうでしょうか？ わたくしには鈴代さまが吸血鬼であるとは、とても思えません。鈴代さまが吸血鬼だとすれば、あのように喧嘩を売るご発言は、決してなさらないはずですよ。あれでは、処刑されてしまったも致しかたございません」

土方中尉「そうはいつでも、あとの二人が吸血鬼に襲われたとしか解釈できない以上、やはり、鈴代の遺体を調べることが、村人側にとって最も有益な選択だと、余は思うぞ」

小間使い葵子「それもそうですね。でしゃばってしまい、申し訳ありませんでした」と、葵子はあっさりと言き下がった。

女将志乃「じゃあ、今日の遺体の調査は鈴代さんにするわよ。みなさん、異論はないわね？」

誰からも反論する声はあがらなかった。それを確認した女将は、そろそろと鈴代の遺体に近づいて、しゃがみ込んだ。

しばらくして、落胆した様子で志乃が立ち上がった。

女将志乃「残念だけど……、鈴代さんは吸血鬼ではないわ！ どうやら、ただの村人だったようね」

土方中尉「なに？ それは真か？ ううむ、またもや我らの目論見めくろみが外されてしまったか……」

後家都夜子「あのお、確認ですが、鈴代さんは天文家ではなかったのですよね？」

女将志乃「そうよ。能力を持たない村人よ。天文家でも、探偵でも、片想いでもないわ」

書生和也「僕たちは、再びふりだしに戻されてしまったのですね」
行商人猫谷「吸血鬼はまだ二人とも生き残っている……。俺たち七

人の中にな」

令嬢琴音「うちも報告させてもらうわ。うちの想うお方は、まだ感染なさっていません」

小間使い葵子「志乃さま。ご主人さまのご遺言を、公開していただ

きたいのですが……」

女将志乃「そうよね。昨日の日中に調査した子爵の遺言は、昨晚になつて確認できたわ。高樫子爵さまの遺言の概要をいうと、彼は無力の村人である。最後に心ならずも天文家と偽証してしまったのは、もう一日生き延びることで、村側に貢献できると考えたからである。無念の死を遂げた初日の時点では、吸血鬼のしつぽを捕まえる手がかりはほとんど皆無であるが、自分が主張した通り、菊川氏は極めて黒っぽいような気がする。もっとも、片想いと天文家の兩名を告白させた行為については、わたしは何ら悪気を感じてはいない。わたしの発言によつて、結果的に天文家や探偵、片想いが救われていると確信するからである。以上ね」

行商人猫谷「なるほどねえ。お坊ちゃんらしい、負けず嫌いのコメントだなあ」

令嬢琴音「それじゃあ、明日になれば、今度は鈴代さんの遺言が聞けるのね。楽しみだわあ」

行商人猫谷「ふん。女将が無事に生きていれば、という条件付きだがな……」と、猫谷が含み笑いをした。

女将志乃「そうそう。昨日の投票について、みなさんには、誰に投票したのか正直に告白してもらいたいわね。事前の申告と投票結果には、かなりのずれがあったように思うけど……。まず、いいだしつぺのあたしからだけど、あたしは予定通り、小間使いの葵子に一票を投じたわよ」

土方中尉「余は宣言通り、霊媒師に投じたぞ」

令嬢琴音「うちも、いうた通り、小間使いに投じたわ」

書生和也「僕も予定通り、鈴代さんに投じました」

後家都夜子「わたしも鈴代さんに入れました」

小間使い葵子「申し訳ありません。わたくしは宣言を覆して、鈴代さまに一票を入れました。理由は単純で、自分が助かりたかつたらです」

行商人猫谷「最後は俺か……。実は、俺は宣言では小間使いに入れ

る予定だったが、実際は鈴代に票を投じたんだ。理由はって？
単なる気まぐれに過ぎないが、鈴代に入れたくなつたからさ。そ
もそも、葵子が黒だという主張にもさしたる根拠はなかつたしな…
…」と、猫谷が弁解がましく語った。

女将志乃「まとめると、あたしたちが入れた七票は、鈴代さんに五
票と、葵子さんに二票ってことになるわね。すると、亡くなつた菊
川さんと鈴代さんの入れた二票が、鈴代さんと葵子さんに一票ずつ
ということになるわね。変ねえ？ 当初の宣言だと、お二人は
ともに和也さんに投票すると宣言されていたはずなのに、どうして
気が変わったのかしら？」

行商人猫谷「霊媒師の行動については、至極単純だ。自分が死にた
くないから、葵子に一票を投じた。それだけだ！ しかし、そうな
ると……、蠟燭職人の行動は奇怪だよな？ なんで、和也君に投じ
るといつていた票を、豹変して霊媒師に投じたのであろうか？」

後家都夜子「きつと、当初は和也さんを疑っていたけど、その後の
会話から鈴代さんが最も黒っぽいと考え直されたのでしょうか」

土方中尉「おそらくそうであろう。それしか、事實は説明できない
ぞ」

女将志乃「でも、もしかしたら、あたしたち七人のうちで、嘘をつ
いている者がいるんじゃないの？」

行商人猫谷「だとしてもだ……。いずれにせよ蠟燭職人が投じた票
は、霊媒師か小間使いのどちらかだから、和也君に投じるはずの票
を奴が覆くつがえしたという不可解な事實は、依然として説明できない」

令嬢琴音「案外、不可解でもなんでもないとちゃう？ 鈴代さん
の発言って、ぜんぜん筋が通つたらんかつたし、菊川さんが鈴代さ
んを黒だと思つても、ちつとも変やないわ」

本当にそうなのだろうか？ 頼りない直感に過ぎないが、僕はこ
の時、菊川氏の不可解な行動の中に、何か真相を解明する重大な手
かりが潜んでいるような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3777z/>

小説・吸血鬼の村（出題編）

2011年12月24日10時46分発行